

# イヤホンに実況 流れ共有

## 1 国際学院

今、つなげよう



独自大会を前に

「一、二塁にランナーがいるぞ」

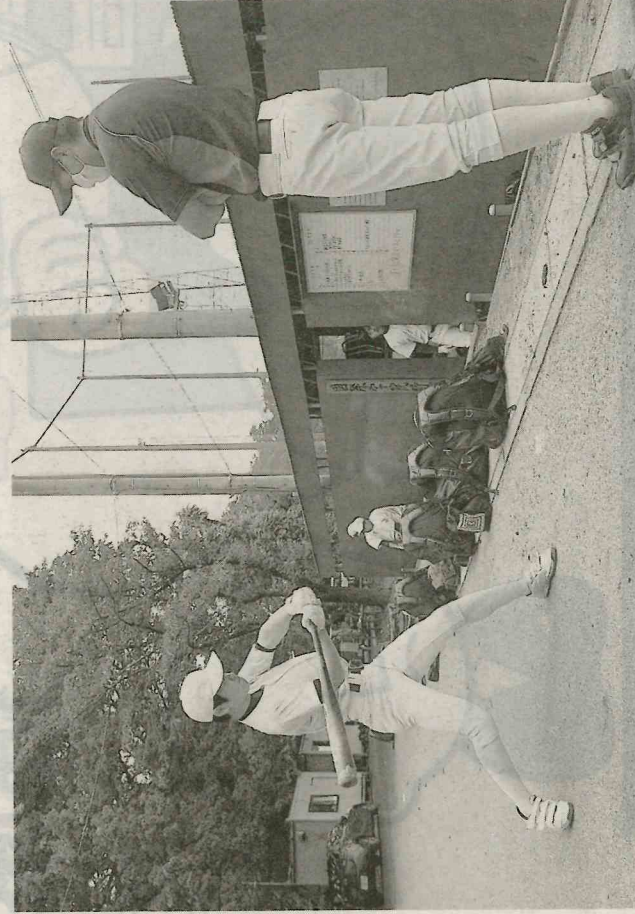
6月、国際学院（伊奈町）の紅白戦。バックネット裏にいる斉藤皇君（3年）のイヤホンに、立原監督のこんな実況が次々と届いた。

斉藤君の視界はもやがかった感じで、視力がよくない。試合の流れをつかむには、耳から入ってくる情報が欠かせない。

目に異変を感じたのは昨年の夏ごろだった。野手の守りで、なんでもないころがグラブにおさまらないことが増えた。バットを振っても球に当たらない。内野でも打席でも、球が急に消

えてしまう。

視界の中心に「ぞろぞろした」感覚を感じるように



素振りをする国際学院の斉藤君（左）と立原監督（7月16日、伊奈町）

## 目に異変 背番号20「一員」の実感

なり、徐々に視界がふさがった。左目、そして右目と。レーベル遺伝性視神経症だった。診断を受け止め切れず、判明した夜は気を紛らわすように、泣きなが

ら素振りを何百回と繰り返した。

「治ったときにすぐ野球ができるように」持ち前の明るさで、弱音を吐かず、ひたすら筋力トレーニングや素振りを一人、続けた。

それでも、グラウンドから聞こえてくる仲間の大声や打球音を耳にすると、やりよのない悔しさが広がった。白球を追えない悲しさ、つらさがふつふつとわき、どうしようもなく苦しかった。

一転、斉藤君が仲間と「試合」を実感できるきっかけが生まれた。

新型コロナ禍で臨時休校が続いたとき、部ではビデオ通話などができるアプリを使い、監督や部員がコミュニケーションが取れるようにしていた。斉藤君もイヤホンを耳につけ、仲間と会話をした。この時、立原監督は「実況中継」を思いついた。「これなら（斉藤）君に試合を感じさせることができる」

試合中、相手投手の球種や打球の行方、アウトカウントなどを斉藤君に伝えることで、試合の流れを共有できるというわけだ。

「そろそろ投手の調子は悪かったですよね」「2死での判断の理由は何ですか」。実況を聞いた斉藤君が、こんな質問をするのもしばしば。やりとりが生まれるため、チームの一員であるという気持ちが強くなる。

独自大会初戦の10日は、背番号20をつけてベンチ入りする。イヤホンはつけない。試合の指示に専念する立原監督に代わり、川島亮樹部長から直接、試合展開を聞く予定だ。

埼玉球児たちの夏の舞台が8月8日から始まる。新型コロナ禍で、もがきながらもつながりを大切にして独自大会に向かっている姿を取材した。

（この連載は、高橋綾斗が担当します）